

基本姿勢

安心・安全な環境を整え、被害的な立場にある児童生徒の人権を守る

事実確認

①行為の反復性 ②アンバランスパワー ③シンキングエラー を踏まえて

Ⅰ. 深刻化のリスク

① 行為の反復性

一定期間、繰り返されている行為または一方向的な関係性(行為を変えて繰り返されていることもある)

② アンバランスパワー
(力関係の不均衡さ)

一方的に弱い立場にしている
・集団の規模や人数の差
・体格や運動・知的能力の差
・集団内の地位や人気度の差
・賞罰のコントロール
などの要因

③シンキングエラー(人権に影響を及ぼす間違った考えや認識)

被害的な立場にある児童生徒の人権侵害が正当化されてしまう要因

ア 被害的立場

・今までの経験から
「助けを求めても意味がない」
「助けを求めているのは格好悪い」
「誰もが経験すること」
「自分で何とかするべきこと」
・自尊心(自己肯定感)が低く
「いじめられる自分が悪い」
「今の状況は仕方ないこと」
●これらの考えが表れた言動

イ 加害的立場(加害モデルの有無)

●相手への共感性を欠き
「これは遊び(いじり)」
「みんなやっていること」
「自分もやられたことがある」
「特別扱いされる権利がある」
など、相手を傷つけていることに気付いてないと思われる言動
●加害行為のモデルとなるような重要な存在(親、教師、先輩、友達など)

ウ 傍観者

「何をしたらいいかわからない」
「報復を恐れている」
「何かをすることで状況のさらなる悪化を恐れている」
などの心性をうかがわせる状況

エ 教職員

身近な教職員の行動が
・影響を与える行為を助長していないか
・加害モデルになっていないか
・傍観になっていないか

Ⅱ. 対応のための判断

①	被害感	有・無		判 断
②	行 為	有・無		
③	客観性	有・無		

Ⅲ. 対応方針

(i) 個人へのアプローチ

ア 被害的立場

- ・安全の確保
- ・共感的態度で自尊感情の回復
- ・要望や希望の聴き取りと対応
- ・集団への帰属、孤立の回避、支援者との関係構築
- ・時間をかけて継続的な支援
- ・被害時の対処法を教授
- ・ソーシャルスキルの向上
- ※いじめ事案と一緒に指導しない
→自身の特性・性格を被害要因と捉えてしまう)

イ 報告者

- ・安全(秘匿性)の確保
- ・傍観したことへの傷つきのケア
- ・報告への労い(報告に「意味がなかった」と思わせない対応)

ウ 加害的立場

- ・許されない「行為」であることを徹底
- ・威圧的な指導(頭ごなしに叱責すること)はしない
- ・事実について、短く分かりやすい説明
- ・間違った考えや認識を正し、共感することを教える
- ・時間をかけて継続的な支援

(ii) グループ・集団へのアプローチ

【所属集団へのアプローチ】

- ・心配、不安、恐怖などの気持ちを共有する場の設定
- ・いつ、何をすべきだったのか、議論する機会をつくる
- ・今後の対応方法を教える

- 【安心・安全な学校づくり】全教職員での取組が必須
- ・集団のもつ仲裁に向かう力を自覚させる(ピア・サポート)
- ・人間関係における問題解決スキルの向上(SST)
- ・道徳教育及び人権教育の強化